

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員の話し合いから生まれた理念で、認知症の為に見失われがちな、その人の尊厳、個性、可能性、本人の願いを見出して、その人らしい人生を「笑顔」＝幸せに暮らせるように支えていくための道標としている。また、行動指針として「3つのします」「3つのしません」を職員皆で考えて加えた。その理念を事務所に掲示し、常に意識できるようにしている。	理念、行動指針についてはホーム内に掲示し共有と実践に繋げている。合わせて月1回開かれるスタッフ会議の席上「3つのします」「3つのしません」という行動指針を確認話し合い、日々の生活の中で「嬉しい気持ち」を味わっていただけるように心掛け支援に当たっている。家族に対しては入居時に理念、行動指針に沿った支援について説明している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	感染症の流行により、地域との交流が以前に行えないが、保育園の園児達と庭を挟んで交流会を行っている。利用者との交流を楽しみにされているボランティアの方が玄関先に手紙と野菜を差し入れて下さったりしている。地域の文化祭に入居者の作品を出展した。コロナ禍ということもあり、中々ボランティアの方との交流の場を持っていない状況ではあるが、年賀状や暑中見舞いを出すなど工夫して交流を続けている。	新型コロナ禍が続き、地域の行事も中止という状況が続き残念であるが、今年度は3年ぶりにコミュニティーセンターで地域の文化祭が開催され利用者と職員で作った作品を展示していただいた。また、利用者手作りの年賀状、暑中見舞いのハガキを地域ボランティアの皆さんに発送し新型コロナ禍で関係が途切れないようにしている。看護専門学校生徒が半年間に2名ずつ、定期的に職場体験のために訪れ、ケア全般に渡り利用者との交流の機会を持ったという。更に、隣の保育園園児が窓越しで「おゆうぎ」を見せ、子どもとふれあい楽しいひと時を過ごしている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域に向けた認知症の研修会や勉強会の依頼に対応したり、実習生の受入を行っている。また介護相談も受けている。機会があればできるだけショートステイも受けるようにしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	グループホームの実際の姿、現状の悩みなどを、できるだけ伝えるように心がけている。委員の方からの提案をいただくことも増え、講座開催やボランティア協力などにもつながっている。今以上に事業所が地域の一員として受け入れてもらえる方法を運営推進会議などで検討している。コロナの影響で実施が難しいが、運営推進委員協力のもと、喫茶の開催等を検討している。	感染状況が拡大していた時には書面での開催となっていたが、基本的には対面での運営推進会議を行っている。利用者代表、家族代表、須城市11ブロック区長、地域住民代表、民生児童委員、市高齢福祉課職員、地域包括支援センター職員、ホーム関係者の出席で2ヶ月に1回開催している。今年度より新たに隣接するコミュニティーセンター館長と保育園園長がメンバーに加わりコロナ収束後を見据え、地域として一体感を持った活動の展開について話し合いサービスの向上に繋げるようにしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月のお便り「ふれあい通信」を見ていただいている。運営推進会議、その他の機会にも担当者で相談する機会が増えている。コロナ禍でなければ、夏祭り等の行事に参加いただいたり、生活の様子を見ていただいている。ケースによっては入居者についての相談を、地域包括支援センターと行うこともある。	市高齢福祉課、地域包括支援センターとは連携を取り必要に応じ相談している。介護相談員の来訪が2名、2ヶ月に1回あり利用者と交流の時間をもち、特記事項があれば報告をしていただいている。介護認定の更新調査は調査員が来訪し職員が対応し行っている。	

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護保険法指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	事業所内研修として、身体の自由を奪うだけでなく、ホームの施錠や、本人の意思を無視した誘導も身体拘束となると理解して取り組んでいる。「禁止されている」ということだけでなく、相手の立場で考えることを大切にしている。行う場合は必要性をチームで十分検討の検討を行い、身体拘束委員会において毎月の状況を確認、報告して記録に残している。	法人の方針として拘束のない支援に取り組んでいる。ホーム内部では相手のことを考えたケアについて話し合い徹底を図っている。家族に対しては安全のために身体拘束に当たることが必要となった場合の取り組みについて説明し理解を得るようにしている。玄関は日中開錠されている。そのような中、外出傾向の強い方がいるが本人がどうしたいのかの原因を探り安全確保に繋げている。また、転倒危惧のある方もおり、家族と相談の上、足元センサーを使用している。月1回開かれる身体拘束適正化委員会と年1回の身体拘束の研修会で拘束に対する意識を高め支援に取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修会に参加したり、勉強会のテーマとして取り上げている。『自分がされて嫌なことは虐待の可能性があり』という考えのもとに取り組んでいる。不適切な介護が虐待に繋がるものと意識することが大切と考えている。スピーチロック・ドラッグロックについても拘束、虐待に繋がるものとして、理解を深めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	過去には成年後見制度の利用者もおり、手続きの際の協力なども行った。入居者の状況に応じて、家族に説明を行っている。後見人を業務とする司法書士にも相談することができる。須坂市社会福祉協議会の職員に協力を得て、成年後見制度や日常生活支援についての説明と利用の検討を行ったケースもある。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	ご家族代表の方以外にも出来るだけ同席いただき説明を行っている。契約内容の確認だけでなく、グループホームでの生活のリスクやターミナルについての考えも説明し、ご家族の意向や希望も聞いている。制度改正・報酬改正の時は、家族会の機会でも直接説明を行い、重要事項説明書を改めて交わしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ホーム玄関や総合受付横にご意見箱を設置しているほか、契約時にその他の相談窓口の説明も行っている。運営推進会議には、ユニット毎の家族代表に出席してもらって意見を聴いたり、家族会の際にはアンケートも実施している。面会時の家族との意見交換も積極的にいき、ご家族からの要望については真摯に対応するよう心掛けている。	家族との関わりが途切れないよう面会は「ガラス越し」や「オンライン」で継続し、電話を用いてきめ細かく連携を取るよう心掛けている。今年度は3年ぶりに地域交流センターに於いて家族会を行い、懇談会の席上様々なことが話し合われ有意義な時間を持つことが出来たという。ホーム便り「ふれあい通信」で毎月ホームの様子を知らせている。また、誕生日や母の日には花のプレゼントが家族より届けられている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月のスタッフ会議とリーダー会議で、運営に関しての方針や、運営方法についての説明と提案を行うと共に職員の意見を聞いている。個々職員が積極的に意見を出し合えるカンファレンスや、「おやつとペーパー」を取り入れて気軽に意見を出せる環境を目指している。必要に応じては個別に意見交換を行っている。	月1回全職員参加の下、スタッフ会議を行い、運営に関する考え方の徹底と意見交換、連絡事項、各種勉強会等を行い運営内容の充実に繋げている。合わせて管理者、主任、副主任の出席でリーダー会議を行い、職員のモラルアップなどについて話し合っている。また、人事考課制度があり年度初めに業務目標と自己啓発目標を立て、それに対し年3回管理者、主任による個人面談が行われスキルアップに繋げている。更に年1回、職員対象のストレスチェックが行われメンタルケアにも取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を導入し、業務目標、自己啓発目標を策定し、向上心を持って働けるしきみを築いている。入居者の状況に合わせた勤務シフトを取ったり、負担の少ない職員体制を検討している。キャリアパス制度が本格導入され、目標を明確にして研修等に取り組めるようにしている。各段位にチャレンジして取得している職員も居る。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で外部研修参加が難しい中でも、オンライン研修を自由に活用できるようになり、学べる機会を確保している。また必要な研修内容をDVD化して共有している。キャリアパスにおける「求められる能力」や「必要な研修」をもとに、自ら学ぶ機会を持つことを支援している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	代表者は近隣地域（長野圏域）の小規模事業所のネットワークづくりに参加し、他事業所の研修会に参加したり、情報交換や学び場づくりを行っている。長野県宅老所・グループホーム連絡会にも当初より参加し、情報の収集を行ったり、代表者は研修講師を務めている。		
II.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前情報に加え、出来るだけ本人からの情報を集めるよう「聴く」ことを大事にし、本人の考えや趣味趣向など、本人の言葉も大事にしている。本人の不安や混乱も考え、徐々に環境に慣れていくことが出来るよう、意識的に会話をする機会を多く持ちながら信頼関係を築くように心がけている。入居後、ホームが安心して生活できる場になる為に、自宅との行き来を可能としている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族からも話をよく聞き、本人の思いと家族の思いを知った上での支援を考えている。それまでのご家族の思いや苦勞の理解に務め、信頼関係の構築を目指している。話を聞く機会を多く持ち、本音をくみ取るようにしている。こちらからの相談など、細やかに連絡を取り合い、家族の意向を常に確認している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	満室時、申し込みや相談を受ける際は状況を詳しく伺い、その方の状況に応じたサービス情報を提供したり、近隣の事業所を紹介をしたりしている。入居までの相談にも応じている。またショートステイの希望も聞き、利用につなげるようにしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	共に暮らす者として、都度声を掛け合い関わり、喜怒哀楽を共にする事で、お互いが安心できる関係でいられるよう心掛けている。本人の力を発揮できる場面を作っていくことを重要と考え、ホームの中で共に行うことを心がけている。理念に照らして、共に暮らし、笑顔のある生活を目指している。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染対策で対面での面会が出来ない時期は、ガラス越しの面会、オンライン面会、電話でお話をする等して、家族とのつながりが途切れないようにしている。家族には適宜本人の様子を伝え、支援等について一緒に考えるよう心がけている。敬老会には家族からのメッセージを書いてもらい、記念品として送る等、家族との関係を感じられるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で以前ほど出かけることができなくなっているが、自宅や自宅周辺の散歩等、以前の関係を継続することに配慮している。日々の会話の中にも、馴染みの場所や人を話題として取り入れたりしている。自宅の庭の手入れに出かけるなど、以前の関係を継続することも支援している。	近所にお住まいだった利用者は時折自宅の様子を確認に出掛けている。また、飼っていた犬も現在はホームで一緒に生活しておりペットとして他の利用者からも可愛がられている。手作り年賀状や暑中見舞いハガキを家族やボランティアに発送して喜ばれている。新聞チラシ等を見て欲しい物等は家族と職員が買い求め利用者に渡している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の関係を重視し、その関係に配慮した話しや活動(アクティビティー)ができるような時間を作っている。共に暮らす者として入居者同士がお互いを認め合え、支え合い、協力し合えるような関係づくりの支援に努め、職員はそのような場面では感謝とねぎらいの言葉がけを意識している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	複合施設内で住居が替わった利用者には、会うたびに声をかけたり、ご家族からの相談にも応じている。亡くなった方のご家族が、その後も関係を継続し、ホーム運営に協力していただいている方もいる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々利用者のそばに行き話をする機会を多く持ち、本人の言葉から本人の思いを察するように努めている。意思疎通の難しくなった方も、それまでの関わりの中から、本人の意向を汲み取り支援を考えている。パーソンセンタードケアひもときシートなどを学び、それを取り入れたカンファレンスを行い、様々な視点から一人ひとりの「～したい」を支援したいと思っている。	殆どの利用者は意思表示の出来る状況であり、飲み物選び、洋服選び等、出来るだけ本人に決めていただくようにしている。意思疎通の難しい方がいるがジェスチャーや二者択一での提案も交えながら本人の意向に沿えるよう取り組んでいる。日々の気づいた特記事項についてはパソコンの中の介護記録の申し送り欄に纏め、出勤時に確認し日々の支援に繋げている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に面談を行ったり、本人と家族や関係者から情報を収集し把握に努めている。情報はファイルにまとめ共有し、センター方式などを活用して、これまでの生活歴やその人らしさをつかむ努力をしている。ご家族にも協力いただき、なじみのある生活環境づくりを考えている。実際に生活している場所を訪ねて生活環境を知ることも行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の言葉、行動、活動の様子、日中の過ごし方などを細やかに見て記録に残し、スタッフ間で共有できるようにしている。また、心身状態についてもスタッフ間で情報共有し、記録に残す事で異常の早期発見、改善に繋がれるようにしている。利用者の状況を把握して、統一した目的で介護に当たれるよう情報を共有し活かしていきたいと考えている。変化がある方についてはユニット会議などで話し合い状況を共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人とご家族の意向も反映させ、評価・アセスメントからケアプラン作成へと計画作成担当者と担当者が中心となり、チームスタッフの意見を聞きながら原案を作成するようにしている。可能な限り本人の「○○したい」を支援するよう努めている。	職員は2名の利用者を担当し、第1の理解者として支援に取り組んでいる。3ヶ月毎のケアプランの管理・モニタリングをしており、合わせて口腔ケア、リハビリ、栄養の各加算管理等も担当している。家族の希望は管理者が電話で伺い、担当職員中心にケアマネージャーがプランの作成を行っている。入居時は1～3ヶ月の暫定プランを作成して様子を見て、その後3ヶ月でのプラン作成を行っている。状態に変化が見られた時には随時の見直しを行い利用者一人ひとりに合った支援に繋げている。	

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ほのぼのシステムに利用者の様子やケアの実践、結果、気づき等を入力し、必要な事は申し送りとして共有出来るようになっている。認知症介護の視点を大切に記録を心がけている。特に変化のあったことには、情報共有で統一したケアを行う。また、利用者の著しい体調の変化や、認知症による様子の変化があった際は、3ヶ月ではなく、その都度評価を行い、ケアプランを見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者の状況に合わせて、職員配置や勤務時間の変更を行い、ニーズに合わせて支援が行われる体制を考えている。入居者の1日の生活の流れを重視して、シフトに縛られず柔軟に職員が動くことを心がけている。グループホーム機能を活かして、緊急の受入れを行った。ショートステイも行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在はコロナ禍の為自粛しているが、地域の商店による出張販売での買い物も、定着し楽しみの一つになっていた。季節にあわせた行事を行い楽しみを作り、参加を促している。防災訓練への参加、ボランティアによる催しやお手伝い、地域の保育園、小学生との交流を行っている。入居者の作品を地域の文化祭に出展したり、協力していただけるボランティアの方の畑で野菜の収穫させていただいている。運営推進会議でも新たな地域参加の手段を検討している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在はかかりつけ医を持っている入居者も多い。その方々は家族、本人が受診及び内服薬を定期的に処方して持参する。家族が受診の対応をする場合も、書面で生活の様子等の情報の提供を行っている。クリニック利用者は定期受診を行っている。その他心療内科、総合病院等、適宜受診が必要となった場合の受診対応をしている。	入居時に医療機関についての希望を聞いている。現在、入居前からのかかりつけ医利用の方が数名おり月1回家族対応の受診となっており、必要に応じ情報提供書を作成し持参していただいている。他の多くの利用者は法人クリニックの月1回の受診対応で職員が付き添っている。また、パート看護師が2名おり、日々の健康管理と合わせ併設クリニックと連携を取り、万全な医療体制を整えている。更に、心療内科を利用されている方も数名おり、管理者が状況を説明し家族と連携を取り受診の対応をしている。歯科については週1回の往診で対応し、法人内の歯科衛生士の来訪もあり口の健康維持にも繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護者は常に入居者と関わりを持っている為、異常の発見や気づきも多く、そのたび看護師に情報を伝えており、対応も早期に行える。グループホームの看護師が不在の時は、クリニックの看護師に対応してもらっている。夜間は介護職員からの連絡をグループホームの看護師が受け、指示を出す、駆けつけるなど必要な対応をしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者が入院した際、その状態や様子、また退院に向けた情報など、医療機関の地域医療福祉連携室等と連携を取り合い、入居者が安心出来るように努めている。職員が面会に行き、洗濯の協力等必要な支援を行っている。可能な限り早めの退院をして、元の環境に戻れるように調整を図っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ご本人が何を望んでいるのか、家族がどこで最期を迎えさせてあげたいのかよく話し合い、グループホームで出来ること出来ないことを明確にして、家族、職員を含めた関係者が悔いを残さないことが、ご本人にとっても最良の最期だと考える。過去実際に看取りを行った際に、職員それぞれが考えたことを大切に、グリーンケアやカンファレンスも重要と考えている。	終末期に対する指針があり、入居時に説明し家族の意向を聞き同意書を頂いている。食事を取ることや入浴が難しい状態になり終末期に到った時には家族、医師、看護師、ホームで話し合いの機会を設け、 本人・家族 の希望を確認の上医師の指示の下、終末期支援に取り組んでいる。同じ法人の特別養護老人ホームも併設されており、住み替えも含めた支援に取り組んでいる。開設以来、数名の方の看取りも行い家族より感謝の言葉を頂いている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会を行ったり、講習会への参加を呼びかけ、救急時のAEDや心臓マッサージなど、実践し処置が誰でも行えるようにしている。また、法人内の研修で急変時の対応や心肺蘇生・AEDの研修を行って職員は参加している。緊急時の連絡体制、連絡方法等は、必要に応じて確認する機会を持っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、施設全体で夜間と昼間を想定した防災訓練を実施し、地域住民・消防団、運営推進委員(コロナ禍は参加自粛)等の方々も参加し、利用者も参加している。ホーム独自にも研修や避難方法の検討を行い、非常時に即応できる体制を整えている。地震により連絡が取れなくなった時の取り決めも行っている。複合施設として、福祉避難所の協定も結び、台風水害時には受け入れも行った。	新型コロナ禍のため地域住民の参加がない状態で内部のみ防災訓練を春と秋の2回実施している。消防署員参加で消火訓練などを行い講習を頂いている。職員の役割分担を明確にして、複合施設のため、火元に近い事業所の利用者から避難誘導を行うことを統一して訓練している。合わせて緊急連絡網の確認訓練も行っている。備蓄については法人全体で充分な量が確保されている。グループホームとしては長期保存の効く、非常食、レトルト食品中心に用意している。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人を大切にすること、プライバシーを守ることにについての意識向上を図っている。基本は人生の先輩を敬うことで、特に言葉遣いに気をつけたいと考えて研修機会も設けている。利用者本位を実現するために本人を主語にした介護を心掛け、日常的にチェックし、確認や改善を行っている。	言葉遣いについては特に気を配り、「お伺い」を立て、馴れ馴れしくならない様よう心掛けている。また、職員同士利用者の前では他の利用者の話しをしないよう徹底している。呼び掛けは入居時に希望を聞き、「さん」付けでお呼びしている。中には「先生」等の前職の呼び方でお呼びしている方もいる。また、入室時には「ノック」と「失礼します」の声掛けを忘れないようにしている。年1回、プライバシー保護に関する研修会を行い意識を高め支援に繋げている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の様子をよく観て、相手に合わせた理解しやすい言葉で、時に問いかけ、傾聴するということを大切にしている。相手の気持ちや意思の表出を、ゆっくり待ったり促したりして、本人の意思を表していただくよう関わっている。意思表示の難しい方も、必ず声をかけ、観察することで小さなサインにも気づけるように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先せず、本人の希望やペースに合わせた生活を支援することが重要と考えている。利用者の意向を聞くことを大切に、漫然と1日過ごすことのない様、昨日からの流れも考慮しながら、今日の取り組みを利用者、職員で相談して行うことを目指している。日々その方に合った支援を考え、限定的にせず、臨機応変に行うことを良しと考えている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段の服も自分の好みを尊重できるように支援している。外出の際はや行事の際は、意識しておしゃれを楽しむ声掛けなどを行っている。利用者同士が褒め合っている姿も見受けられる。本人の意思で理容・美容も選択いただいている。		

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	好物を聞いたり、料理本を入居者と一緒に見て献立を決めたりしている。個々の状態に合わせて、食事を使う食材の下ごしらえから、味付け・味見・配膳・下膳・食器洗い等、出来る部分を職員と一緒にやっている。お祝いや行事などでは料理に工夫を凝らし楽しんでいただけの食事を心がけている。希望があればその都度応えている。行事の時など出前を利用することもあり、喜ばれている。	殆どの利用者は自力で食事が摂れる状況である。献立は10時のお茶の時に料理の本やチラシを見て利用者の希望を聞き、冷蔵庫の中の食材を見て調理している。また、殆どの利用者は食事作りのお手伝いに参加し、調理、盛り付け等を楽しみながら行っている。敬老会や母の日、父の日等の行事の際には「チラシ寿司」「豪華弁当」「鰻」等をテイクアウトし楽しんでいる。更に、お彼岸や雛祭り等には「おはぎ」「おやき」等を手作りし味わっている。秋には「野沢菜漬け」や「干し柿」作りも楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	状態に合わせて量や形態を配慮し、野菜を多く取り入れる等、栄養のバランスを考えた食事を提供している。声掛けにて水分摂取を促すと共に、個々の食事量や水分量のチェックも行っている。また体調に合わせた食事や栄養補給もしている。複合施設の管理栄養士の助言も受け、6ヶ月ごとに栄養評価を実施。月に1回の管理栄養士による研修も行っている。必要に応じて管理栄養士によるカロリー計算等の支援を受けている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	ADLに合わせ声掛けや介助で、うがいや口腔ケアを行っている。その際、口腔内の状態把握にも努めている。夜間には、義歯を預かり洗浄している方もいる。歯科医の往診や受診支援も行っている。歯科医師の指示の元、歯科衛生士に利用者の口腔内の状態評価・指導を受ける体制を整え、月に1回の研修も行いケアに活かしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄のパターンや、利用者がその時に発するサインを把握して、出来るだけトイレで座って排泄が可能となるよう支援している。排泄に関するニーズを特に重視し、最優先で支援し、定期的な声かけや誘導などの支援も行っている。課題がある場合は、集中的にアセスメントを行い、適切な支援に結び付けることを心がけている。	自立の方が数名で、一部介助の方が大半という状況である。排泄記録を参考にパターンを把握し、様子を見て早めに声掛けを行い、トイレ誘導を行っている。合わせておやつ前と食事前後にも定時の声掛けを行っている。排便については便秘傾向の方は医師の指示の下コントロールを行い、一人ひとりの体重を測り、それぞれに合わせた「乳酸飲料」「お茶」「ジュース」等の水分摂取を勧め、排便に繋げている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排泄の状態が認知症状の憎悪につながることを職員は理解しており、個々に排泄チェックを行っている。適度な運動、乳製品の摂取、食事内容を工夫している。薬による調整が必要な方は、日々状態をチェックして医師に相談しながら調整を行っている。水分摂取量のチェックも行い、便秘防止に努めている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことのできる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	出来るだけ本人の希望を考慮し、時間や回数を決めている。心身の清潔だけでなく、リラックスし、コミュニケーションを図れる機会と捉えている。身体的、精神的に困難がある方には、その方に合わせた介助方法を工夫し、安全に気持ちの良い入浴を心がけている。清潔保持の為に足浴、清拭も取り入れている。	見守りで自立の方が三分の一、一部介助の方が三分の二という状況である。入浴拒否の方もおらず、利用者の希望に合わせて週2回の入浴を行っている。また、仲の良い人どうし2人で入浴される方もいる。入浴剤を使用し、「菖蒲湯」「ゆず湯」等の季節のお風呂も楽しんでいる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の疲労感や体調を確認し、コミュニケーションを取りながら、休息や午睡を促している。それ以外の時は、出来るだけ離床し活動を促し、適度な疲労感を得ることで、安眠に繋がるように心がけている。その方のペースを大事にして、その方に合わせた生活が送れるように支援している。		

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	健康管理表で内服薬等が一覧でき、薬の効果がわかるようになっており、処方の変更された場合は追記皆が確認できるようになっている。服薬による症状の変化は、看護師を通じて主治医に相談している。服薬方法は、個々のADLや様子に合わせて支援を行い、必ず確認し記録している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	日々の生活の中に役割を持っていただくことで、自信や活気に繋げる取り組みを行っている。生活歴の中から可能な事をさりげなく働きかけ、出来たことに対して一緒に喜んだり、感謝の言葉を伝えている。その方の体調や表情を見極めて、本人の自主性を引き出す働きかけを心がけている。庭仕事をしたり、内職を行う方もいる。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩を希望する方がいれば、他の方も誘って、職員が付き添い出かける。その日の取り組みを、朝の時点で打ち合わせ、なるべく個々に合った活動を支援する。少しでも陽にあたっていただく機会を作りたいと考えている。日常の会話で行きたい所を把握し、可能ならばに機会を作り出かけるようしている。コロナ禍においては、感染防止に配慮し、ドライブで景色を楽しんだりしている。	外出時、独歩の方が半数、車いす使用の方が半数という状況である。天気の良い日には複合施設の周りを散歩したり、ベランダに出て季節の花を眺めながら外気浴を楽しんでいる。新型コロナ禍が続き制約を受けながらの外出が続いているが、感染対策を取った上で車から降りずにドライブを兼ね外出している。季節に合わせて市内の見慣れた景色の中で「お花見」や「紅葉見物」を楽しんでいる。また、秋には施設内で運動会を行い「玉入れ」や「パン食い競争」で体を動かし楽しい1日を過ごしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	月に一度、出張販売を行ってくれる商店の協力を得て、施設内でも買い物をする機会を作って支援している。少額お金を所持している方もいて、売店や外出の際はお支払いをして頂き、お金の理解や使い方を忘れる事のないような支援をしているが、コロナ禍においては中止している。入居者からの預り金は、法人金庫・事務所内にて管理させていただいている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人と家族の意向を確認しながら支援を行っている。希望があれば家族へ電話をしている方もいる。携帯電話を所持している方もいる。コロナ禍においては、オンライン面会やガラス越しに面会いただいている。また、できる方はこちらから手紙を書く支援も行い、年賀状も自分の家族に宛てて書いて、意向に沿って代筆させていただいている方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食事作りを食堂で行うことによって、皆が参加できたり、匂いや音で興味をそられたり、食欲が出るように考えている。音楽やTVなどは、利用者と相談して点けたり消したりしており、不快な音や刺激が無いよう心がけている。また、四季折々の飾り付けや、季節の花を飾り、季節感のあるスペース作りをしている。	一日の大半を過ごす食堂は季節の飾り付けがされており、現在は「運動会」が飾られている。壁には利用者の活動の様子を映した写真も貼られている。合わせて毎月発行されるお便り「ふれあい通信」の拡大版が掲示され、ホームの活動の様子が紹介されている。壁には利用者が作成した見事な「はり絵」作品が数多く飾られている。また、ホーム東側には見事なお花畑と家庭菜園用の畑があり利用者の活躍の場となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールに食事席以外のテーブルやソファを置いている。廊下やテラスにも椅子を置いている。思い思いの場所で、気の合った利用者同士で会話を楽しんだり、一人の時間を過ごしたりされている。地域交流センターでひなたぼっこをしたり、歌を唄ったりして過ごす方もいる。		

グリーンクリスタル

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際は、使い慣れた家具類や好みの品を用意していただくようお願いし、その後も様子を見ながらご家族と相談して環境を整えている。家族の写真や、花を飾り、自分の居場所だと実感し、くつろいでいただけるように工夫をしている。希望に合わせて、和室・洋室に模様替えすることもある。	各居室には洗面台と広い押入れが備え付けられ、整理整頓が行き届き暮らし易い造りとなっている。家族と相談の上、イス、衣装ケース、ハンガーラック、テレビ等が持ち込まれ家族写真や季節の花に囲まれ、のんびりとした生活を送っていることが窺えた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	全体がバリアフリーの作りになっていて、車椅子生活も可能となっている。廊下・食堂以外にも共用のトイレや浴室など随所に手すりを設置している。また状況に応じて付け替えを行い安全確保している。ドアには写真と名前のプレートを付けて、自分の部屋とわかるようにしている。居室内も、個々の身体状況にあわせたベッドや手すりを選んで設置している。		